

II. 調査の結果

第1章 日本大学学生の基本特性

1.性別

本学第一部16学部全体の女子学生の比率は31.9%に対し、回収サンプルでは若干高め。女子学生比率は30年前に20%前半で21年前から30%台。以降漸進的に増加。

本学の16学部全体（第一部のみ）の女子学生比率は31.9%です（平成30年5月現在の第一部在籍者）。回収サンプルの女子学生比率は35.0%となっており、女子学生の方が調査協力率がやや高かったことがわかりますが、分析上支障のない範囲の偏りと考えられます。

学部別に女子学生比率を見ると、芸術学部が67.3%（在籍者での比率は64.3%）、薬学部が58.7%（同55.3%）で高く、工学部で8.2%（同9.3%）、理工学部で15.4%（同15.4%）、生産工学部で17.7%（同16.5%）と工学系学部で低くなっています。

調査結果の経年変化を見ると、第1回調査が行われた昭和63年度（30年前）の女子学生の比率は23.2%でしたが、9年後の平成9年度から30%を超え、僅かな増減を繰り返しながら漸進的に増加傾向を示しています。

図1-1 性別(平成30年度全体・学部別・経年変化)

	女子学生の比率の変化		昭和63年度との差
	男性	女性	
平成30年度全体	65.0%	35.0%	11.8
法学部第一部	71.2%	28.8%	17.4
文理学部	54.1%	45.9%	11.1
経済学部	61.4%	38.6%	30.4
商学部	53.4%	46.6%	32.0
芸術学部	32.7%	67.3%	12.8
国際関係学部	49.2%	50.8%	3.9
危機管理学部	65.3%	34.7%	-
スポーツ科学部	63.3%	36.7%	-
理工学部	84.6%	15.4%	8.5
生産工学部	82.3%	17.7%	13.3
工学部	91.8%	8.2%	6.5
医学部	74.7%	25.3%	-0.9
歯学部	50.4%	49.6%	20.4
松戸歯学部	65.1%	34.9%	10.2
生物資源科学部	57.7%	42.3%	29.7
薬学部	41.3%	58.7%	-9.7
昭和63年度	76.7%	23.2%	-
平成3年度	75.6%	24.2%	1.0
平成6年度	71.4%	28.4%	5.2
平成9年度	68.7%	31.3%	8.1
平成12年度	66.6%	33.2%	10.0
平成15年度	67.0%	33.0%	9.8
平成18年度	65.1%	34.9%	11.7
平成21年度	66.5%	33.5%	10.3
平成24年度	67.3%	32.7%	9.5
平成27年度	64.5%	35.5%	12.3
平成30年度	65.0%	35.0%	11.8

2.入学状況

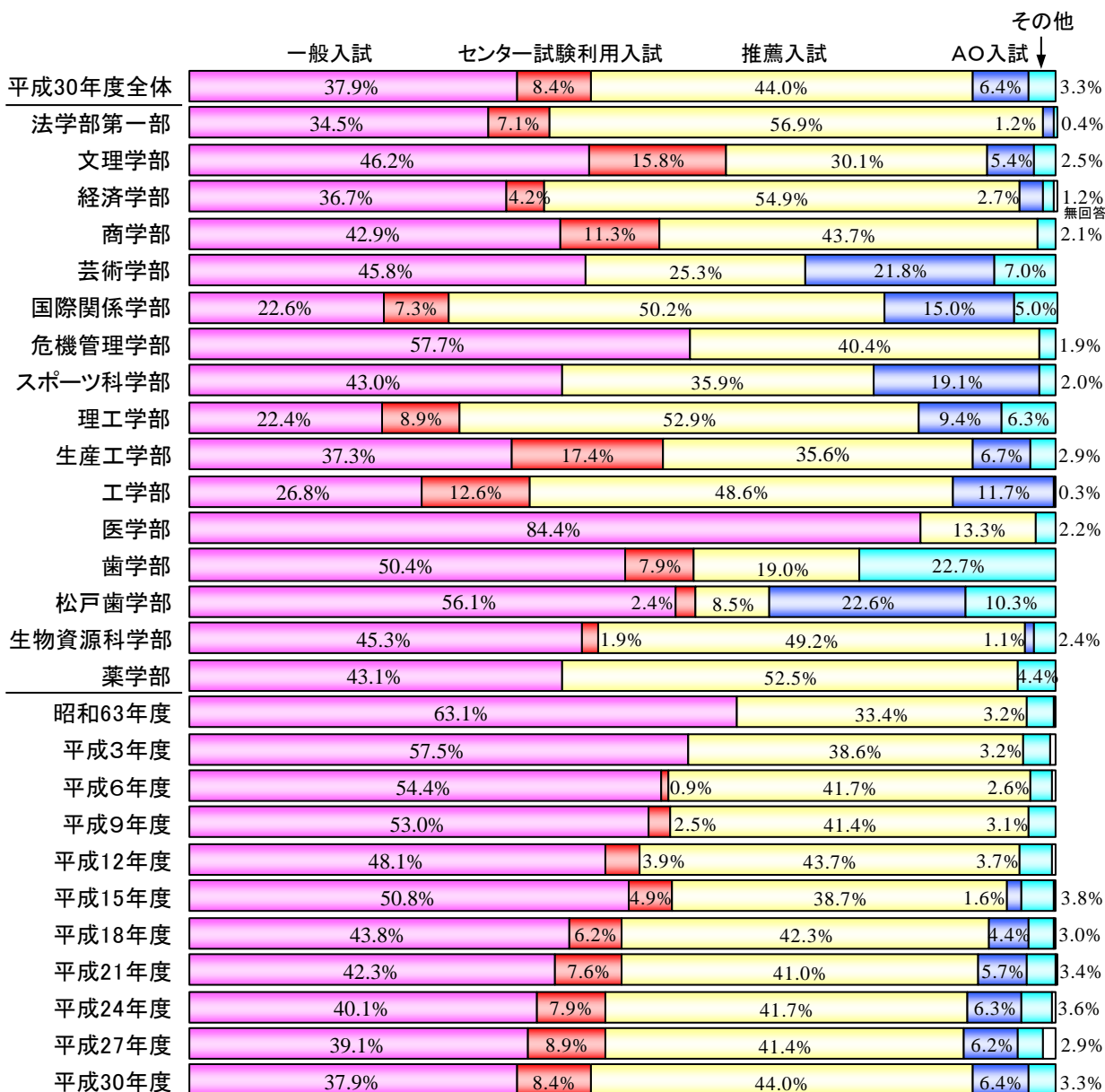
学部により入学状況は異なるが、全体では推薦入試が44%と最も比率が高い。
一般入試による入学者の比率は減少傾向が続き、入学形態は益々多様化へ。

本学への入学状況を見ると、一般入試は37.9%にとどまっており、推薦入試が44.0%で最も比率が高くなっています。平成4年度から採用されたセンター試験利用入試が8.4%、平成13年度から実施されているAO入試は6.4%となっています。

一般入試入学の比率は医学部で84.4%と非常に高く、推薦入試は法学部第一部・経済学部・理工学部・薬学部で50%台、AO入試は松戸歯学部・芸術学部で20%台で相対的に高いといった特徴が見られます。

経年変化を見ると、一般入試による入学者の比率が減少する傾向が続いています。また、推薦入試は、6年前から一般入試を上回っており、3年前より2.6ポイント増加しています。

図1-2 現在の学部入学のために受けた入試(平成30年度全体・学部別・経年変化)



3.出身高校等

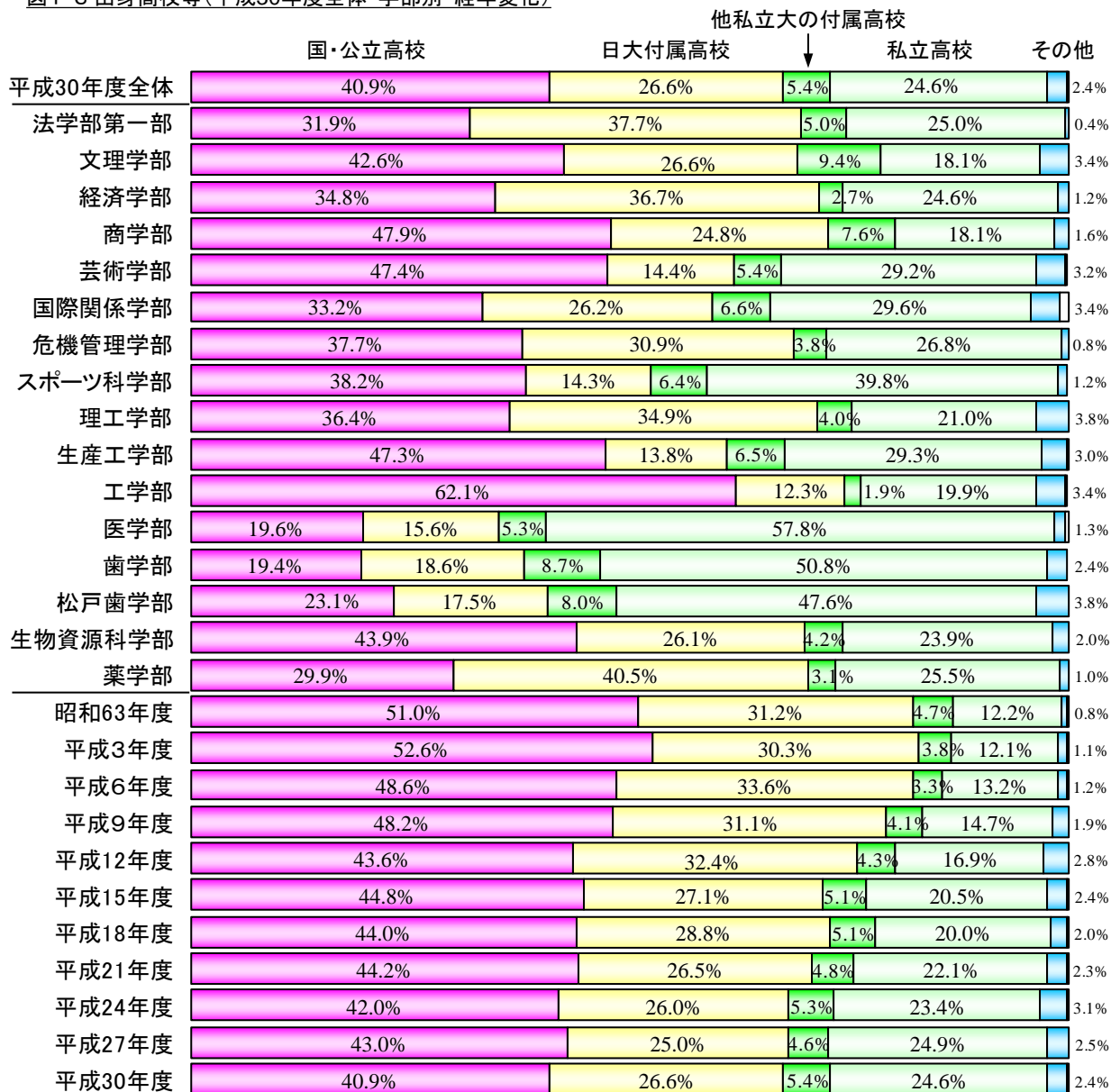
国・公立高校出身が41％、次いで日大付属高校出身27％、私立高校出身25％。
工学部は国・公立出身が6割、医学部・歯学部は私立高校出身が過半数。
国・公立高校比率は3年前より若干減少、私立高校は平成6年度から漸増傾向。

本学学生の出身高校等を見ると、国・公立が40.9％で比率が最も高く、次いで日大付属高校が26.6％、私立高校が24.6％となっています。

工学部は国・公立高校出身が62.1％を占めており、医学部と歯学部では私立高校（日大付属以外）出身が過半数、法学部第一部・経済学部・薬学部は日大付属高校出身の割合が最も高くなっています（40％前後）。

経年変化を見ると、国・公立高校出身者は平成12年度から横這い傾向でしたが今年度は3年前より2.1ポイント減少、日大付属高校出身者は平成12年度までは30％台でしたが平成15年度以降20％台後半で推移、私立高校出身は平成6年度以降概して漸増傾向が続いています。

図1-3 出身高校等(平成30年度全体・学部別・経年変化)



(注) 「その他」は、高卒認定合格、外国所在の学校、大学・短大・高専卒業、その他。

4.住居形態

自宅通学者の比率は60.0%。

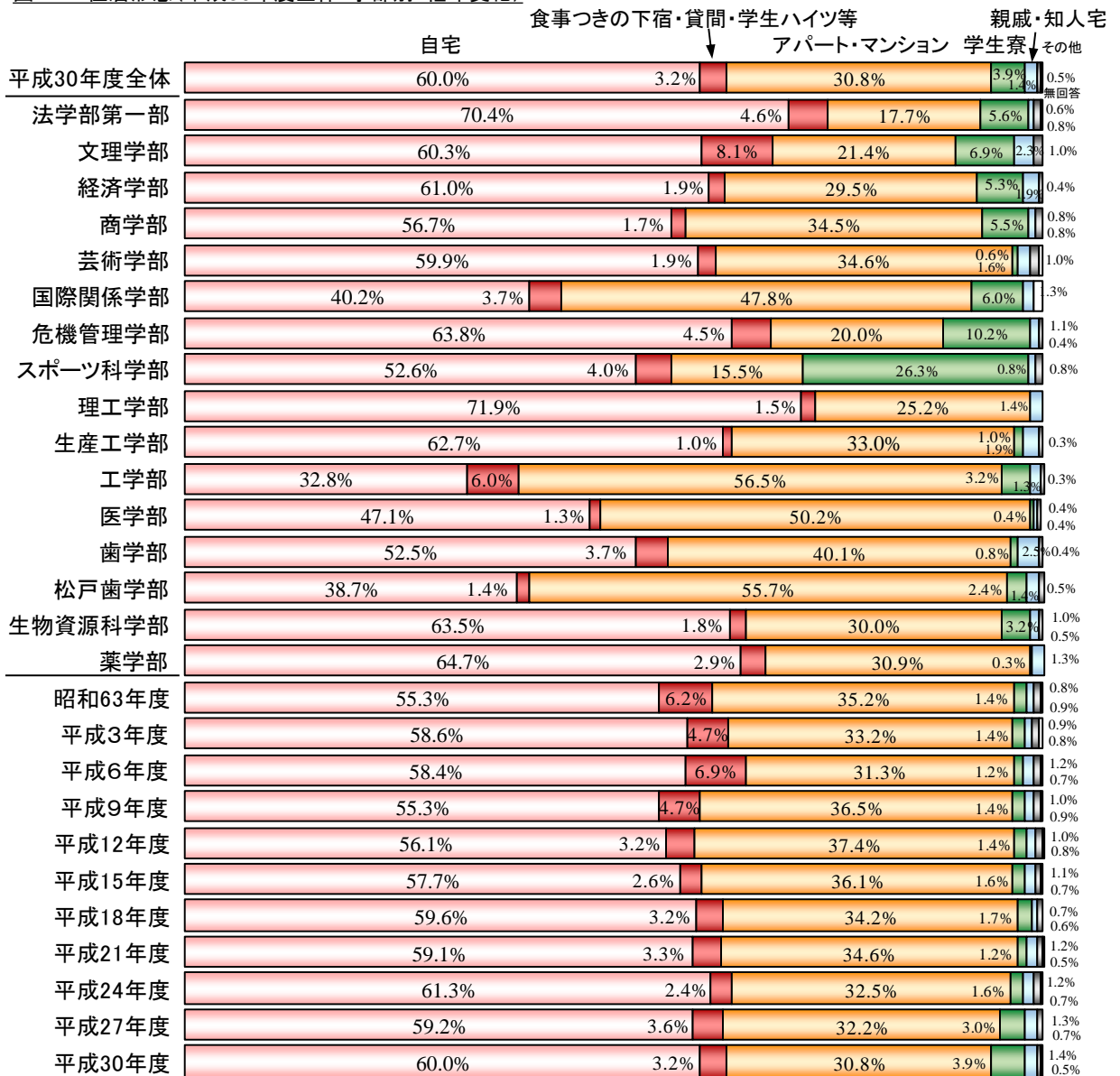
本学の経済支援策としての新しい学生寮運用などにより学生の住環境に変化。

住居形態について全体で見ると、自宅が60.0%を占めています。自宅以外では、アパート・マンションが30.8%と最も比率が高く、日本大学の学生寮が3.9%、食事つきの下宿・貸間・学生ハイツ等が3.2%、親戚・知人宅が1.4%となっています。

自宅通学者の比率を見ると、キャンパスが都心にある法学部と理工学部は70%を超え高くなっていますが、福島県郡山市にある工学部で32.8%、千葉県松戸市にある松戸歯学部で38.7%、静岡県三島市にある国際関係学部で40.2%と低く、学部により学生の住環境に大きな差があることがわかります。

また、本学では「創立130周年記念事業」の一環として、学生に対する経済支援を拡充するため学生寮の建設を推進し、平成26年度から新しい寮の運用を開始していますが、本学の学生寮居住者は平成27年度で3.0%、平成30年度は3.9%と着実に増加しています。平成28年度に創設された2学部を見ると、スポーツ科学部では26.3%の学生が学生寮を利用、危機管理学部でも10.2%と学生寮の利用が進んでいるようです。

図1-4 住居形態(平成30年度全体・学部別・経年変化)



※学生寮…日本大学の学生寮

5.通学時間

通学時間の中央値は50.7分。文理学部の62.7分から工学部の11.5分まで学部間に差。
商学部では3年前より8分短縮。

本学学生の通学時間は「15分以内」が19.6%、「16～30分」が12.7%、「31～60分」が26.2%となっており、30分以内が32.3%、1時間以内が58.5%となりますが、1時間半を超える学生も18.2%います。本学学生全体の通学時間の中央値を求めると50.7分となります。

通学時間の中央値は、学部によりバラつきが大きく、文理学部（62.7分）・危機管理学部（62.1分）・商学部（61.2分）では1時間を超えています。工学部（11.5分）・国際関係学部（24.2分）・松戸歯学部（24.8分）・医学部（27.3分）・歯学部（29.8分）では30分以内と短くなっています。学部ごとに、通学時間の中央値と自宅通学率の関係を見ると、自宅通学率が高い学部ほど通学時間が長いという傾向が顕著に表れています。両者の相関係数は0.870と非常に高い数値となっています。

さらに、平成27年度からの変化を見ると、商学部では自宅通学者の比率が6.3ポイント減少し通学時間が69.2分から61.2分と8分短縮されている点に注目できます。

図1-5 平均通学時間と自宅通学者の比率の相関図(平成30年度全体・学部別)

